

【翻訳】

遇 資州

九十年代における中国学術思想叢書批評

李 梁

十年前、空疎浅薄で不毛の論と見なされた五年間にわたる文化フィーバー現象が長安街での銃声によって消されたが、それが孕んだ叢書出版のブームは絶えることなく延々と九十年代の今日まで続いてきた。八十年代に叢書が思想文化行動のステッキだとすれば、跛足のエリート文化人達はまさにそれを支えにして想像する文化サークルに集まっていたのである。だが今日では、叢書はあたかも倒壊したダムから溢れ出てきた洪水のようだと言っても過言ではない。ただ前者と違って、今日では叢書がもはやエリート化された産物でも一種の思想行動でもなく、むしろ一種の商業競争そのものになってしまったのであろう。

いわゆる商業的叢書は、八十年代末に思想的叢書に継いで現れた。一九八九年に刊行され始めた「当代経済学系列叢書」(上海三聯書店)は、四つの子系列に分けられ、その構成は「文化 中国と世界」叢書と酷似している。「現代社会と人間」(主編陳維政、貴州人民出版社)は、隔年ごとに新シリーズを刊行し、その都度表紙の模様替えを行っているが、その題目選びは人文心理学、キリスト哲学から政治哲学へと傾斜され、ちょうどこの十年来学術思想における焦点の推移を物語っている。叢書の名付けは、まるで文化高地を奪い合うようだったが、今ではそのような文化高地がすでに残り少なくなってきた。「走向未来」や「文化 中国と世界」および「二十世紀文庫」などのように、八十年代においては、思想的叢書の名称そのものがすでにある種の精神的指向性を帯びている。それは、或は理想主義の情熱に満ち溢れ、或は暗に思慮深き文化構想を内包させている。しかし、今日の叢書名は、高度に専門化されたかある仮面を被りかねないのである。八十年代の思想が急進だったとすれば、九十年代のそれは分化であると言えよう。それだけに叢書の出版も雑然とした光景を呈し、多少なりとも奇抜なものが現れてもそれほど不思議なことではない。もし良い叢書名が使い果たせいでなければ、「学術前線」(北京三聯書店、1998)という「戦線」如き語呂式の叢書名はどうやって現れてきたのだろうか。ジェイマソン(Fredric Jameson)を顧問の座に据えたポストモダン理論の系列では、「知識人図書館」(主編王逢振、J. Hillis Miller、北京中国社会科学院版、1998)と名づけられている。あたかもデリダ(Jacques Derrida)やド・マン(Paul De Man)だけが真の知識人に足りうるとも言うように。

二、

仮に八十年代における思想文化は、清朝晩期以降、学界による西学の紹介移植という要務を承継し、更に中国文化の変革という目標を抱えていたとすれば、当然、その西学理解およびそれを採用する見識が問われ、ただ単に商品陳列であってはならない。「二十世紀外国文化名人書庫」(主編林賢治、上海遠東出版社、1996)では、五十名ほど外国「文化名人」のリストを挙げているが、その範囲は八十年代の記憶を超えていない。「二十世紀人類思想家文庫」(企画編集倪為國、上海三聯書店、1997)では、四十人のリストがあげられ、九十年代に新たに知り合った「名人」も何名が含まれ、多少の進歩はあるものの、その題目選びにはとりわけ高い見識があるとはやはり言い難い。ただ、既に出版された三種(ハイデガー、フッサール、シェーラー)はいずれもその字数が百万以上に上り、むしろこの十年來の蓄積だとみてよからう。

「二千年來、華夏民族が受けた儒家学説の具体的影響で、最も深く且つ最も大きかったのは、制度法律公私生活の方面においてであって、学説思想に関する方面においては或は仏道二教に及ばないのかも知れない」(陳寅恪)。この論断が間違いなければ、中国思想と制度の近代的変容に気兼ねしている者にとっては、百年来國語学界において蔑ろにされてきた泰西の宗教思想と法律思想を重視すべきであろう。九十年代においてキリスト教思想の紹介輸入の仕事が非常に目立ってきた。「世界と宗教叢書」(主編者何光滬、四川人民版、1989年より)は、宗教学と宗教哲学に重心を置きながら選んだ題目は殆どキリスト教思想の經典ではない。「文化 中国と世界」では、個別的に神学系列を設けていたが、『ヨブの天秤の上にて』を刊行しただけで、天安門での銃声によって計画の頓挫を余儀なくされた。「歴代キリスト教思想學術文庫」(主編者劉小楓、香港漢語基督教文化研究所/北京三聯版、1994年より)は、長大なキリスト教神学書目を並べてその範囲はギリシア晩期から当代に至るまで、まさに規模雄大と言うしかない。勿論、これでキリスト教フィーバーが現れたと思うのは、明らかに早計である。「漢訳ユダヤ文化名著」叢書(主編者傅有徳、山東大学出版社、1996年より)でも、ユダヤ教思想の經典(例えば『タルムード』法典や中世の『迷える人々の導き』から当代ユダヤ教哲学に至る)を翻訳し紹介しているが、少し注意してみると、ユダヤ教思想が只儒教思想の一枚の鏡とされたに過ぎず、ユダヤ教フィーバーなんかどこにもないではないか、ということがすぐわかる。「歴代キリスト教思想學術文庫」では「中世漢語学者の中国文化を豊かにするため仏典を翻訳し伝播しようとする智慧と気迫」を自らの編集趣旨とし、まるで三千人訳場と比べようとする構えである。もしも仏学の古代思想に与えたインパクトが極めて深遠だったとするなら、目下行われているキリスト教經典の翻訳紹介が次の千年紀における中国文化思想への意義は何かと予知できる人はいるだろうか。

キリスト教という鏡の中で漢語思想が映す出されるのは単なる思想学説にのみ止まらない。バーマン(Harold J. Berman)の『法律と革命: 西洋法律伝統の形成』(「外国法律文庫」主編者江平、中国大百科全書出版社、1993年より)はM・ウェーバの考えを更に一步推し進め、中世の「教皇革

命」から西洋自治法律制度の形成へと溯源している。西洋における政治と宗教とを超越する法律制度の自治観念を通して、儒教自身の宗法制度の姿がくっきりと浮かび上がるだろう。西洋の法律制度は古代ローマに起源し、ローマ教会の保守、伝承によって、はじめて近代の隆盛を迎えたのである。「仮に魏晋の時輸入されたのは天竺の仏教ではなくギリシアの哲学またはローマの法律だったら、則ちその後千余年にわたる中国の歴史は必ず絶対に違う発展があるはずである」(蕭公權)。「ローマ法研究翻訳系列」(主編者スキバニ、黃鳳、中国政法大学出版社、1992年より)の中国社会に対する現実的役割は間違いなく「外国弁護士叢書」(編集主幹魯堅、中国政法大学出版社、1992)に及ばないが、しかし『ローマ法史』、『ローマ法教科書』、キケロ(Cicero)の『共和国論、法律論』などの文化思想における意義とは弁護士ハンドブックといった類のものは比べられるものではないだろう。

「外国法律文庫」においては、新旧自由主義の法理学の名著{ケルセン(Hans Kelsen):『法と国家の一般理論』、ドウォルキン(Ronald Dworkin)『法律帝国』及び『権利に真剣に対処せよ』}が選ばれ、「当代法学名著」(主編者季衛東、中国政法大学出版社、1994年より)においては、「批判法学」、「法の経済学」など当代法学の新潮が選ばれたにもかかわらず、西洋法律思想の翻訳は規模のある系統を成すにはまだほど遠かった。事実、まだ中国語訳されていない西洋思想史上における法理学の代表的著作が決して少なくはない。ヘーゲルは偶々マルクスの先生だったため、その『法哲学原理:或いは自然法と国家学要綱』が幸いにも六十年代に中国語に翻訳されたが、それに対し、カントの『法の形而上学原理:権利の科学』は一九九一年となって漸く中国語訳がみられたのである(北京商務版)。本邦学徒の中西自然法の異同をめぐる討論にはかなり年数がかかったが、西洋自然法研究に対する翻訳は今迄僅かに台北聯經出版社から出された「現代名著叢書」におけるデンテレヴェー(Alessandro Passerin d'Entreves)の小書『自然法:法律哲学導論』(1984)しか数えられない。法律制度は、西方においては工具の次元のもののみならず、一種の道徳理性でもある。本邦学徒の西学研究は、多くは哲学思想の面に力を入れ制度思想の面に注意を払おうとするものがすくなくすぎる。今日では、ヘーゲルの地位がハイデガーに取って代わられたせいか、九十年代に何冊も専門著書が著わされた。ただ靳希平の『ハイデガー早期思想の研究』(「当代中国哲学叢書」主編者張汝倫、陳昕、上海人民出版社、1995)と張祥龍の『ハイデガー思想と天道』を除き、大抵通論的なものに過ぎず、ハイデガーの思想とドイツ民族主義的政治制度との内在関係に言及したのは皆無である。ハイデガーとナチス法学家であったシュミット(Carl Schmitt)が互いに激賞しあい、とくにハイデガーはフライブルク大学へ「法学院の立て直し」に行こうとする旨をシュミットへの書簡の中で表明していたほどである。ハイデガーの哲学は、ナチスの政治思想と直接的な関連を持っていないかも知れないが、しかし「だんだんと人々の政治神話への抵抗力を弱めているのは確かである」{カッシーラー(Ernst Cassirer)『国家の神話』、「政治学叢書」主編者鄭永年、浙江人民出版社、1988}。そもそも本邦民の政治的神話への抵抗力が非常に弱いので、ハイデガーの哲学が一層更に彼らを酔わせているだろう。

漢語学界における非常に数少ない法学研究の徒は、西洋法理学を深く研鑽する意欲がなさそうで、一步踏み出したかと思うと本土化へと引き戻ってきた（梁治平『清代習慣法』 社会と国家、「法律文化研究中心文叢」主編者梁治平、中国政法大学出版社、1996）。かれらは、或は「法律の多元主義」（林瑞『儒家倫理と法律文化：社会学的視点による探索』、台北巨流出版社、1994）を主張したり、或は法治の「本土資源」（蘇力『法治とその本土資源』、中国政法大学出版社、1996）を掘り探ったりして、流行りの法律文化学又は人類学によって、いわゆる普遍適合論を槍玉にあげている。知るところによると、個人に道德の優先性を付与した現代の権利法理論は西洋の「基本的価値観」であるに過ぎず、本土の習慣と合わず、儒教伝統の礼法文化にとって受け入れられないそうである。ドウォルキン『権利に真剣に対処せよ』の「中国語訳版序言」がこのように言っている。儒教礼法が社会に道德の優先権という価値観を付与したが、ある社会の政府とその社会自身をいっしょくたにし、また政治を社会と等置させない限り、それだけでは個人権利論の普遍適合論を解消させるにはとても十分ではない。まして社会の道德優先性は必ずしも個人権利の反対を意味しないし、社会の道德価値も法律の保護、とりわけ政治上の脆弱集団と個人の保護に代替することができない。「西方の歴史の中で、人々は法律によって社会の中で通行している政治と道德価値を拒絶しようとずっと周期的に求めている」（パーマン）。社会の宗法道德をもって法律秩序に代替しようとするのは儒教の政治制度の伝統であるといえる。もし儒教の家法（俞榮根『儒家法思想通論』、広西人民出版社、1992）をユダヤ教法（『タルムード』）又はイスラム教法（高鴻鈞『イスラム法』 伝統と近代化、「中国社会科学院青年学者文庫」主編者胡繩、北京社会科学文献出版社、1996）と比較すれば、宗法とは何かという問いが解けるだろう。こうしてみれば、本土の法理学者達は「地域的知識」の正当性をもって自由平等の法的合法性を拒絶しようとしたのか、宗法伝統の延長継続を支持しようとしたのか、どちらだろうか。

三、

現代中国史の変遷を再解釈するのは近年来学界の主要課題である。近代化理論が八十年代に学界に導入されたが、まだ現代中国史の解釈に応用されていない。共同執筆による『中国近代化史：第一巻1800 - 1949』（主編者許紀霖・陳達凱、上海三聯出版社、1995）は共産党文化の解釈枠組みを突破したものの、多くはまだ歴史の叙述に止まり理論的分析がむしろ少ないのである。九十年代に入って現代中国史研究の専門著書がかなり増えてきたが、しかしその理論解釈は、大半は欧米の定説を踏襲しているか、さもなくば理論的解釈がまったく無くて史料を並べているだけである。金觀濤・劉青峰の『開放中における変遷』 中国社会の超安定構造再論（香港中文大学中国文化研究所当代中国文化研究センター特別刊行、1993）は、著者達の八十年代に提起した「中国社会の超安定構造」論を受け継ぎ、一家の説を成している。この著書に対し、恐らく本邦の批判理論家達は、かつてハーバマスが系統功能論の大師であるルーマンに言ったことを真似て、「君のやったことはすべ

て間違いだが、皆上質なものである」とオーム返すのかも知れない。

近代化理論は九十年代においてかなり進展があった。中でも際立っているのは比較近代化翻訳叢書である。「世界近代化過程研究叢書」(主編者羅榮渠、北京大学出版社、1992年より)がまだ完成しておらず、「近代化の衝撃に晒された世界」(主編者陳方正、上海学林出版社、1996)では、トルコ、スペイン、ロシアの近代化過程を学界の射程内に導入し、近代化研究における歴史文化類型の比較意識を切り開く可能性を示した。ロシアの近代化の道は中国近代化の道に直接な影響を及ぼしている。今では、かつてロシア現代思想における「反動派」が人気を呼び始め、瞬く間にロシア内戦時代の白軍に味方する「白学」が次々と現れてきた。「ロシア白銀時代文化叢書」(企画劉文飛、汪劍釗等、雲南人民出版社、1998)「白銀時代ロシア文叢」(主編者鄭体武、上海学林出版社、1998)「二十世紀ロシア新精神哲学精選系列」(主編者劉小楓、上海学林出版社、1998)などは、あたかも民粹主義宗教を逆精算しようとするようである。他方では、レーニン主義とロシア伝統文化との関係を整理しようとする動きも出てきた(安啓念『東方国家の社会ジャンプと文化後進』ロシア文化とレーニン主義の問題、中国人民大学出版社、1994)。「マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン」の翻訳編集を職業とする「中共中央馬列著作編訳局」所管の出版社もそうした整理作業に参入してきた(金雁、卞悟『農村公社、改革と革命』村社伝統とロシア近代化の道、1996;マルコピッチ、ターク他『国外学者のスターリンモデル論』李宗禹主編「当代世界と社会主義叢書」、1995)。これは、その次の一步として、学界では中国のマルクス主義と儒教伝統との関係の整理に着手すべきことを暗示しているのではないかと思われる。

近代化理論は一種の歴史哲学である。ある種の歴史哲学を検討することは他のある種の歴史哲学でしかない。しかし、漢語学界に用いられうる甲論乙駁の武器としての歴史哲学がまだ相当欠如しているのは現状である。文化史家であるホイジンガ(Johan Huizinga)の二部代表作『遊戯の人』と『中世紀の衰退』(「学院文庫」、主編者范景中、中国美術学院出版社、1997)とブルクハルト(Jacob Burckhardt)の『歴史の再考』(「当代思潮系列」、台北桂冠出版社、1992)ローウィット(Karl Löwith)の『世界歴史と救済思想』(「歴代基督思想學術文庫」、1997)などは漢語学界の歴史哲学への視野を広くしたものだと言えよう。もしも本邦の学徒は、これ以上国学大師を歴史哲学の大師と誤認してしまうと、誠に赤面すべきことになる。

四、

かつての「走向未来」と「文化：中国と世界」は、皆単なる翻訳叢書だけでなく、翻訳と研究とを平行し、ある種の文化再建の構想を暗に含んでいた。「社会と思想叢書」(主編者甘陽、企画編集林道群、香港オックスフォード大学出版社、1994年より)は恐らく九十年代における翻訳と研究とを平行する唯一の大型叢書であり、それぞれ西学翻訳(主として近く三百年来の社会思想の大家を重視)、中国研究(主として社会、経済、政治を重視)と中国の社会思想・人文思想研究の蓄積(劉

小楓『近代性社会理論序論：近代性と近代中国』、崔之元『第二回思想解放と制度創新』、張旭東『幻想の秩序：批判理論と当代中国文学言説』という三つの部分によって構成されている。その学術構想は「とくに中国本土社会と思想の経験的研究と理論分析を重要視し」、いわゆる「中国の近代性」がいかに具体的に構成されたのか、「中国の伝統性」がいかに「再び新生を獲られる」という問題を解明し、さらに「全面的に中国人が古くから西方への理解と認識とを検討しようとする」ものだとされている。

「社会と思想叢書」の中国研究が、共産党文化制度下における農村の変化にとくに力を注いだのは主編者の「郷土中国」という理念と無縁ではないらしい。「農民学叢書」（主編者秦暉、中央編訳局出版社、1996）は特定テーマの翻訳と研究とを平行する叢書であり、とくに宗法農民国家の近代化をめぐる種々の問題を重要視し、翻訳にしても論著にしても、その主題は大体その中にある「農民、政治と革命：第三世界政治と社会変革の圧力」という翻訳書の書名によって概括されうる。陳翰笙の華南農村研究、費孝通の華東農村研究と黄宗智の華北農村研究に継いで、秦暉・蘇文の『田園詩と狂想曲：関中モデルと前近代社会への再認識』は西北農村研究の空白を埋めたのみならず、方法論と理論枠組みも上述研究とは異なっている。それは、マルクス主義的でもなければ、また社会人類学又は歴史社会学でもなく、所謂「宗法農民」をもって分析的概念の中核に据えたのである。このことからみれば、もし中国農村 農民研究の背後に隠されている理論問題の論争を明朗化しない限り、たとえもっと多くの「地主、農民、共産党の社会博奕論分析」または「陳村報告」みたいな見事な研究が出て、恐らく依然として何らかの思想的突破があるとは期待できないだろう。

五、

八九年の天安門事件および東欧、ソ連の政治変化と関連して、共産党政治文化に対する研究は九十年代の海外における漢語学術思想の一大重点である。鄒讜の『二十世紀中国政治：マクロ歴史とミクロ行動の角度より看る』（『社会と思想叢書』）とゼルデン（Mark Selden）の『中国社会主义の政治経済学』（『台湾社会研究叢刊』、主編者夏鑄九、1991）は論者の早年の研究成果だったものの、いずれも八九年の事件を解釈しようとし、しかもそれは延安時期ひいては共産党文化形成の初期にまで溯って行われている。しかし、そこには依然として解釈の枠組み、つまり深みのある問題意識と理論枠組の欠如という問題は露呈している。例えば、陳璋津の『中共の権力メカニズム』（『ネオマルクス主義叢刊』、主編者沈起予、台北唐山出版社、1995）では、機能主義を用いて共産党がなぜ八九年の社会主义国家崩壊劇の中で政権維持できたのかを解釈しているように、どうもこじつけの感じが否みがたい。ワルダー（Andrew G. Walder）の『共産党社会の新伝統主義』（『社会と思想叢書』）では、経験社会学の研究に基づき、既存の理論枠組を超えて共産党文化制度に対する分析は相当説得力があると言える。甘陽・崔之元編『中国改革の政治経済学』では、北米中外学者の政治学と経済学による中国研究の最新成果を踏まえたうえ、経済発展が成熟となりつつある中国はいか

に成熟した「政治民族」となりうるか、という命題、および「個体としての市民を以って政治社会の本とし、統一した憲法を以って国家民族の綱領とする」政治構造を打ち出している。

近年来、国内で数多く出された政治理論の翻訳叢書をみる限り、改革開放二十年来の中国はいかにして「政治民族」となりうるかを思案する学者が少なくない。「西方現代思想叢書」(主編者季野ほか、中国社会科学出版社、1996年より)は専ら自由主義政治理論と経済理論の名著{ハイエク(Freidreich A. von Hayek)『奴隷への道』、フンボルト(Wilhelm von Humboldt)『国家の役割について』、ド・ヤーサー(Anthony De Jasay)『再び自由主義を申す』}を出し、ちょうど台湾の「自由主義名著」(台湾遠流出版社)と相補っている。

「現代政治学叢書」(主編者猪口孝、北京経済日報出版社、1991)は東京大学の同名叢書を丸ごと翻訳したものである。そのほか、一部の総合的叢書も政治理論への興味を示し始めてきた。ヘルド(David Held)の『民主のモデル』(「新世紀学術翻訳叢書」、主編者賀和風、中央編訳出版社、1997)、フィンバルク(Joel Feinberg)の『自由、権利と社会正義 現代社会哲学』(「現代社会と人間叢書」)などは、その例である。台湾では、六十年代から憲政理論の翻訳と研究とを開始し、七十年代に「憲政理論叢書」(「国民大会憲政研討会」編、台北正中書局)がみられたが、その民主憲政の建設は今日に至ってようやくある程度の規模を成してきた。このことからみれば、文化フィーバーと現実政治とのあいだに相当遠い距離があることはわかるだろう。「憲政翻訳叢書」(主編者梁治平・賀衛方、北京三聯、1997年より)の出版は大陸の学界における一大事だと言うべきであろう。憲法の根本的な改正は遅かれ早かれいずれはやらなければならないことである。学術思想界でもし十分な準備が備わっていなければ、いざ歴史の時機に直面すると慌てふためてしまうだろう。翻訳が立ち遅れると、理論研究も必然的に立ち遅れてしまうのである。陳滄海の『改憲と政治的解析』(「学術叢書」、台北幼獅出版社、1995)は、憲法学の角度から台湾四十余年の改憲過程を検討している。江宜樺の『自由主義・民族主義と国家アイデンティティー』(「揚智叢刊」、台北揚智出版社、1998)は、目下の政治制度思想における「主義」の争いと結びつき、民族アイデンティティーの問題にあえて立ち触れている。それはいずれも大陸の学界ではいまだなお提起されていないテーマである。

六、

九十年代の思想学術界におけるホットな話題は国学への回帰だとよく聞かれるが、それは大言壮語に過ぎない。国学研究をとってみても、方法論や論題などの面において、インパクトをもっているのはやはり翻訳ものである。例えば、「中国学漢訳名著叢書」(主編者鄧正来ほか、遼寧人民出版社、1989年より)では、題目選びは急だけでなく殆ど始まるとともにあやふやのうちに幕降ろしてしまった感じである。金永義の『中国と西方の法律観念』における中国自然法の議論は、殆ど恣意の臆説であって、『米国学者による中国法律伝統論』(高道蘊ほか編、中国政法大学出版社、1994)

における幾つかの論文の精彩さに比べれば遥かに遜色を感じさせられる。「海外中国研究叢書」(主編劉東、江蘇人民出版社)は、綿密な企画によって相当の系統性をもっているものの、日本の中国研究を中に含めていないのは惜しい。むしろ「欧米中国研究叢書」と名づけた方が妥当であろう。溝口雄三の『前近代中国思维の屈折』(台北国立編譯館、1994、北京中華書局、1997、二つの訳本の内容は食い違いがある)は、「公と私との新しい関係」から出発して、いわゆる中国思想史上における「近代」を勘案しようとしている。その宋明清における自然法をめぐる議論はなお疑問が残されているが、本邦によくみえる問題意識無き思想史研究の喧騒よりは幾分次元が違うと言えよう。それから、三石善吉の『中国の千年王国』(「海外中国学研究系列」、企画編集陳達凱、上海三聯書店、1997)はそれほど深みがあるとは言えないが、しかし「ユートピア」と「千年王国」との相違を示し、さらに歴史上における儒道仏の「千年王国」運動を見出そうとしている試みは開拓的だろう。それから、もし外国人の国学における基本的訓練が本邦人士に及ばないとしたら、大庭脩の『秦漢法制史の研究』(上海人民出版社、1994)にみえる漢簡の読解力には恐らく国人が必ずしも及べるとは限らないだろう。また、仮に外国人の解釈力が国人に及ばないとしたら、多くの国人による章学誠の「六經皆史」説が島田虔次(「日本学者研究中国史論著選譯」巻七にみえる、主編劉俊文、北京中華書局、1993)の思想史問題意識ほど鮮明ではないと思う。

国学研究の進展は基本的文献の発掘と整理に負うところが大きい。欧州の学界では、中世思想文献に対する整理作業は今日に至っても中断せずなお続けられている(例えば筆者の知る限りでは、オーカンの政治学論著『ダイアローグ』が1994年になってようやくラテン語から現代ドイツ語に翻訳されたのである)漢語古典文献の整理とてまだまだやるべきことが山ほどあると言えよう。九十年代の漢語学界では古典の現代語訳が一時盛況を呈している。「中国古代哲学名著全訳叢書」(巴蜀書社)、「中国歴代名著全訳叢書」(貴州人民出版社)、「評析本白話十三經、諸子集成」(北京放送学院出版社)などのように、威風堂々とはいえ、台北の「古籍今注今譯」叢書(国立編譯館中華叢書編集審査委員会主編)と比べたら、その底力の足りなさがすぐ露呈されてしまうのである。これに対し、本当に後世に有益なのは清代学者の著書の整理であろう。「新編諸子集成」と「十三經清人注疏」(中華書局)は清代学者の訓詁学成果を整理したものであり、「中国近代學術名著」(主編朱維錚、北京三聯書店、1998)では清代学者の激昂とした文字を校注し、ちょうど前者と相補う役目を演じている。とりわけ朱維錚の書いた「近代學術名著」各篇の序言は精彩を極め、まったく一部の文化名人の長大な序言と日と同じくして語れるものではないだろう。

七、

九十年代に入ると、いきなり多くの中国文化思想の研究が現れてきた。しかしながら、八十年代のような、一見包括的な中国古代思想の高論はもはや市場がなくなったのであろう。一方、西学研究の上の世代には殆ど新しい考えが見られず、彼らの一部は中国思想の清談に明け暮れている。こ

れに対し、徐梵澄老先生は、大部のインド哲学の重要典籍を訳した赫赫たる功績があるにもかかわらず、さまざまな叢書の序文の中に一度も顔をみせたことがないかわりに、いつの間にかその『陸王学述一系精神哲学』（『學術集林叢書』、主編者王元化、上海遠東出版社、1994）が世に問われるようになった。楊向奎は老いて益々壮なりというか、数理ロジック言語を用いて中国の自然哲学を解釈しようとしている（『自然哲学と道德哲学』、済南出版社、1995）。その論旨は、牟宗三の処女作（『「周易」より中国の玄学と道德哲学を研究す』）の考えかたに戻ったとはいふものの、畢竟思想の活力を失い尽していない。本邦では中、西、インドを兼ねて通じる学者は寥として少ないと言われるが、しかし劉家和はまめ知識しか有しないただの三流学者ではない。かれの『古代中国と世界ある古史研究者の思考』（武漢出版社、1995年初版、1997年二刷）は、古代インドのカースト制度、土地関係、古代ギリシアのクロノス制度の研究にも、また中国經史に対する疑問難問の分析にも皆深い造詣が見られ、その広く社会經濟史、政治制度史と學術思想史にわたる議論は一般の通史通論よりずっと読み甲斐があると言えよう。

史学とは一種の解釈の能力なのである。知識構造が違ふと解釈も自ずと違ってくるのである。余英時は、史学の大家ではあるが、早年では自由主義の社会哲学を研究したこともあって、当代の社会思想問題から中国文化史の奥義を探るのに長じている。七十年代に知識人問題の討論が一世を風靡したと思うと、彼の中国古代知識人論が現れ、目下では市民社会の問題が脚光を浴びると、また『現代儒学論』（『新亞人文叢書』、主編者劉述先、八方文化公司、1996年より）を著して中国の「民間社会と価値観念」論を開示している。その考え方は文化史学者に多大な影響を及ぼしている。閻步克の『士大夫政治演生史稿』（『學術史研究叢書』、主編者陳平原、北京大学出版社、1996）楊念群的『儒学地域化の近代形態』（『三聯ハーバード燕京學術叢書』）、陳明の『儒学の歴史文化機能 士族』（『中国：近代性と伝統』、倪為国ほか企画編集、上海書林出版社、1997）などは、歴史社会学をもちいて特定の政治文化境遇下に置かれた古代知識人による歴史の言説を検討しようとしてゐる。葛兆光の『七世紀前の中国の知識、思想と信仰世界』（復旦大学出版社、1998）は、思想の知識、およびいわゆる大伝統と小伝統との区別を説き、思想史の中の義理弁難を迂回し、文献史家が思想史をやる新しい道筋を示したと言えよう。というのは、哲学系出身の史学者が時下の大哲学の問題を思想史の解釈にもっていった例はまだ疎らだからである。宋学をとってみても、余敦康の『北宋易学の現代闡釈』（『中国：近代性と伝統』叢書）、東方朔の『劉戡山哲学研究』、徐洪興の『理学発生過程の研究』（『当代中国哲学叢書』）、馮達文の『宋明新儒学略論』（広東人民出版社、1997）などは、それぞれ新しい見解を出したとはいふものの、そのやりかたは基本的にはやはり乾嘉学派の考証学を超えていないのである。梁啓超、胡適以降中国思想史を書く人はざらにいるが、牟宗三だけは哲学の大問題を中国思想史の中に持ち込むことができた大師だったと言える。ただ些か残念なのは、彼は古典哲学に深い造詣があるとはいえ、畢竟現代哲学の基本的問題へは殆ど目を向けていなかったということである。思想の問題史的書き方は、論者に義理の問題が要求される。幾ら材料を並べてもその背後にはやはり纏まった思想見識がなくてはならないのである。現代性の諸問題に対して何

らの感覚をも有していなければ、中国哲学の問題史が成り立ちがたいだろう。

明代以来の宣教師が中国思想に与えた影響に対し、思想史上においてずっと十分な評価が行なわれていないのは事実である。この方面では過日の代表作は朱謙之の著書のみであったが、今日では孫尚揚の『キリスト教と明末儒学』（北京東方出版社、1994）、何俊の『西学と晚明思想の裂变』（上海人民出版社、1998）は新たな蓄積だとみてよい。国人たちは、ややもすれば儒仏思想の衝突と融合はどうであれと議論しがちで、あたかも儒耶（キリスト教）の衝突と融合が全く存在しなかったように振る舞っている。王晓朝の『キリスト教と帝国文化』（「学斎系列」、嚴平企画編集、北京東方出版社、1997）では、キリスト教とローマ文化との衝突と融合との比較研究より、明代儒耶思想の衝突と融合の分析に転じている。このことから、キリスト教は必ずしも西方思想にイコールなわけではなく、本邦人士に盛んに言われている宋学が仏学を吸収し消化したのもそれほど独特なことでもない、ということが分かるだろう。

儒学を西方式の宗教に変身させようとしたのは康有為の後でも跡を絶たない。今日では二本の道筋があると思う。一つは心性学の中における「超越の次元」を掘り出し（構想？）たり、もう一つは今文經学をキリスト教聖經学並みに祭上げようとしていたりしている。經学研究が中断されたことはないものの（林慶彰編『中国經学史論文集』、台北文史哲出版社、1993を参照されたい）、今文精神を発揚光大しようとするものは確かに滅多に見られなくなった。王葆玟の『今古文經学新論』（北京中国社会科学出版社、1997）の中で言う「新しさ」とは一体何だろうか。それは中国儒教復興の呼びかけであって、まるで儒教信仰の宣言のようである。むしろ、それは「まえがき」にある数行の言葉であり、全書を通して両漢の經学源流に対する整理分類は畢竟独自の見解も少なくないのである。蔣慶の『公羊学引論』（「国学叢書」、陶鎔ほか主編、遼寧教育出版社、1995）は、「孔子の王道を長久に諸夏に存し、朱子の聖学を今日に絶えんと望む」といって儒教徒の面目躍如としている。黄奇逸の『歴史の荒原：古文化の哲学構造』（巴蜀書社、1995）は經書の中の宗教精神を闡明しようとしている。

「話によると、かれはまた百万字に上る社会倫理学の著書があるそうだが、それは果たして鄭小軍の『儒家思想と民主思想の論理的結合』（四川人民出版社、1995）と同じく、中西の自然法を汎論し、儒教の性善論を天赋人權論に繋げることによって現代の主権在民論を切り開くことができると思い込んでいるのではないだろうか。そしてこういうかれは果たして「市民状態」（カント）と礼法状態との相違が分かっているだろうか。

八、

本邦における民国期學術書の再版は、八十年代に上海書店が「民国叢書」を復刻した時より始まった。その中に好著（例えば劉汝霖の『漢晋學術編年』）も少なくないが、印刷と製本があまりにも粗末であった。しかし九十年代に入ると、情況一変して「民国叢書」が華麗なる装丁に被われ、大

々に復刻されるようになった。たとえば、「民国学術經典文庫」(北京東方出版社)、「二十世紀国学叢書」(華東師範大学出版社)、「中国現代社会科学家選集叢書」(天津人民出版社)、「中国現代学術經典」(劉夢溪主編、河北教育出版社)などがそれである。だが、民国学術の中で復刻すべきなのは果たして国学のみだろうか。社会学の重要著書、例えばデュルケーム(Emile Durkheim)の『社会分業論』やマンハイム(Karl Mannheim)の『イデオロギーとユートピア』はそれぞれ王力の訳本(1935)と李安宅の訳本(1944)があり、一千頁に上るゾンバート(Werner Sombart)の『現代資本主義』も四十年代にすでに翻訳されたが、どれも無視されてしまった。

一九九四年以降の文化気候は十年前に比べ、明らかにずっとすっきりしてきた。知識の蓄積も速まったが、学術思想はどれほど進展を見せただろうか。もし時機が与えられたにもかかわらず、思想者は何ら言うべきことがないとしたら、自己の責任を客観的要因に転嫁することができないだろう。近年来の叢書企画には新時期の学界人物を作り上げようとする狙いが込められている。しかし、八十年代に頭角を現わした学徒は学術においてどれほど進歩しただろうか。「三聯ハーバード燕京学術叢書」では「厳格な専門標準(原則上審査を受ける著書原稿の質が一般に博士論文の水準より高いと要求される)に依拠する」と自称しているが、恐らく叢書の中の著書がすべて博士論文の水準より高いとは言い難いだろう。劉小楓の『个体信仰と文化理論』(「当代学術:川籍学者文叢」,企画編集温潔、四川人民出版社、1997)や、汪暉が文学史研究から思想史研究に転身した成果である『汪暉自選集』(「跨世紀学人文存」,企画編集劉景琳、広西師範大学出版社、1997)などはまだ幾らか自我更新の様子が認められるだろう。

九、

十年前に読み甲斐のある本はそれほど多くなかったせいか、大言壮語的な汎論も先を争って読み耽けっていた。しかし、今日のように訳著や新刊論著および復刻本が多くなってくると、読書人は真剣に本を読むだろうか。バーリン(Isaiah Berlin)の対談を翻訳したある訳者は次のように書いている。バーリンの民族主義論は「我が国の本位文化の建設」に役立っている。なぜなら、「ハルトはノスタルジアが最も崇高な苦痛であると言っている。しかし八十年代末に、ある『紺碧色の文明』を妄評するテレビドラマの中で新天地を追い求めようとする二人の山東大男の望郷の情はなんと嘲笑と非難とを受けてしまった。その時、『走向未来』を熱心に訴えている一部の人々は自分の足元にある中国の土地も世界に属していると信じていなかったみたい」(『万象記事』巻一、251頁)。実はバーリンがくり返そう強調している。つまり、人々は「最も崇高な」価値に対し往々にして最も分岐があり、共通の認識を得ることは不可能である。しかも個体の自由と平等の権利は「最も崇高」なのではなく、最低限度の価値なのである。もしこの訳者が真面目にバーリンを読んだら、全中国人に必ず「最も崇高な」懐郷の情念を持たなければならないと強いることもなかったに違いないだろう。

(Translated and reprinted with permission from Bimonthly Twenty-First Century, Vol.51 (Feb. 1999). Copyright 1999 The Chinese University of Hong Kong. As translator, I greatly appreciate the permission of the CUHK.)